

## 第一回和辻哲郎文化賞 学術部門 受賞作

ウィリアム・R・ラフルーア 著

### 『廢墟に立つ理性—戦後合理性論争における和辻哲郎の位相』

日米国際研究集会（1988年6月7日 於筑波大学）における発表論文

『戦後日本の精神史』（岩波書店）所収

ウィリアム・R・ラフルーア William R. LaFleur 1936年生まれ。

専攻は宗教史・比較文学。シカゴ大学博士。カリフォルニア大学ロスアンゼルス校東アジア言語文化部教授（受賞時）。現在はペンシルヴァニア大学教授。著作は、『道元の研究』、『文化的視角からみた仏教』（共に日本語訳）、他がある。

### 受賞のことば

和辻哲郎文化賞をいただき、本当にうれしく思っています。四年前、姫路に来ようと思いましたが、それは、和辻哲郎も生まれ、育った風土の影響を受けていたはずだと考えたからです。和辻は、この市で青春時代を過ごし、近代日本の偉大な哲学者になりました。和辻の影響はこれからますます世界に広がると信じています。私は二十年前に和辻の『倫理学』に触れ、すぐにこの中に世界に通じる理念があるのではないかと考えました。もっと多くの外国の学者が日本語で和辻の仕事に触れ、そして、その研究成果が多くの外国語に翻訳されるとよいと思っています。ヨーロッパやアメリカでも和辻の研究会が開かれることを願って止みません。姫路市が和辻哲郎という近代日本の偉大な哲学者を生んだことを心からお祝い申し上げます。

※授賞式の挨拶から構成。

### 《選考委員評》

勝部 真長

これまでわが国の和辻哲郎研究が見落していた、少なくとも二つの重大な問題点を、この論文は明らかにしていることに注目しなければならない。

第一は、戦時中、海軍大学校でなされた講演「アメリカの国民性」の真意が、巧みなレトリックのもとにアングロサクソンのしたたかさと合理性の尊重を、軍に気付かせようとしたということ。第二は、戦後思想界が、マルキシズムや実存主義や親鸞など鎌倉仏教に拠り所を求めて狂奔した際、和辻はその三つのどれにも牽かれることなく、ヴィコやヘルデルのような歴史哲学者とフランシス・ベーコンの哲学の意義の再認識に努めた点、現在の哲学の新傾向の先駆者をなしているということである。すぐれた眼力というべきである。

湯浅 泰雄

和辻哲郎文化賞学術部門は、日本の哲学・倫理学に関する学術論文の中から選ぶことになっています。受賞作に決定したウィリアム・R・ラフルーア教授の『廢墟に立つ理性—戦後合理性論争における和辻哲郎の位相』は、現在世界的に問題となっている近代的合理性をめぐるポストモダン論争の観点をふまえながら、戦前から戦後を一貫する和辻哲郎の思想の性格とその意味を、新しい観点から明らかにした論文です。教授は、西洋の近代、及び日本の近代化の過程を見るに当って、和辻の哲学者としての眼がいかに透徹したものであったかということ、明快に論じています。この論文は、和辻哲郎論としても非常にすぐれたものであるばかりでなく、近代日本の哲学を世界的な視点から考察したものとして、重要な意義をもつものと思います。和辻哲郎文化賞の趣旨からみても、まことに受賞にふさわしい作品です。

坂部 恵

「現今では、合理性と近代化の間の純粹で單純な關係がもはや長いことそう思われたほどあきらかではなくなっており、その關係が正しくはどうあるのかを發見することが、今日の知識人の仕事の一つなのである。」

人類史を見る仕掛けとしての「大きな物語り」の破産を宣告するリオタールやローティエの最近の考えを受け継ぎつつ、ラフルーア氏は、このように言う。マルクス主義やウェーバー主義、あるいはキリスト教思想に、歴史の来し方行く末を見定めるよすがをもとめることが大勢を制した戦後しばらくのわが国の思想界にあつて、和辻哲郎は、なにほどこ孤立して見える。その孤立ないし孤高のありようを、今日の視点からあらためて積極的に評価する道をさぐり、和辻の思考を一気に蘇らせようというのが、氏の野心的にしてかつ斬新な企てなのである。

F・ベーコンの柔軟でひらかれた合理性や、ヘルダーの文化多元論（文化相對主義ではない）との和辻のかかわりを、あらためて詳細に検討し、（ついでに、ひとの意表をつく二重解読で戦時中の和辻の名誉回復をも果たしつつ）、氏は、この企図の実現に衝撃的といえるほど見事に成功している。あらたな文化開国と東西交流の時代にむけて、貴重な呼びかけであり、また記念すべき一歩であるというべきだろう。